ISSN 1884-7730

安曇野ちひろ美術館
美術館だより

No.72
2012.9.21

ちひろ・和の心

●2012年9月21日(金)～11月30日(金)

古来より日本人は、花鳥風月に象徴される美しい自然を詩歌や絵画に表現してきました。ちひろもまた、四季折々の花や草木、小鳥や蝶、流れゆく雲や風、輝く月といった自然の風物を、その作品のなかに詩情豊かに描いています。

「秋草のなかの少女」(図1)は、晩秋の野を彩る秋草や枯れ葉が主役の作品です。少女の前景に描かれた枯れ葉は、深いこげ茶色を基調にしながら、紅葉の名残を思わせる鮮やかな赤や朱色、緑や紫といった色が複雑ににじみ込んでいます。枯れ葉の微妙な色合いにも、ちひろは秋から冬へと移ろいゆく季節の気配を感じていたのでしょう。秋草をみつめる少女の姿は、ちひろ自身と重なるようです。

自然をとらえる繊細な感覚とともに、ちひろの絵には造形的にも日本の伝統絵画に通じる面が見受けられます。秋草の向こうに月をとらえた構図(図2)は、琳派などの作品にも多く用いられたものですが、ちひろは実際よりはるかに大きく満月を描くことで、月を見上げる子どもたちの感動を伝えています。1960年代中頃の作品に顕著な、モチーフの大胆なクローズアップや装飾的な画面構成は、伝統的な草花図にも数多くの作例があり、日本的な装飾観を感じさせるものです。

1970年頃よりちひろは、世阿弥の能芸論書「風姿花伝」を愛読するなど、日本の芸術思想に深い関心を寄せるようになります。若いときに修練した書の運筆も生かしながら、水彩のにじみや筆勢を駆使して伸びやかに対象をとらえた後期の水彩(図4)は、色のある水墨画とも評されます。余計なものをそぎ落とし、心象を一瞬の筆でとどめる描法や、「感じる」ことをより重視した晩年の制作姿勢には、能や俳句、水墨画など抑制した表現に、より豊かで奥深い美を見出す日本の伝統的な感受性が受け継がれています。

本展では、自然の風物を描いた代表作、日本の物語をテーマにした絵本『つるのおんがえし』『たけくらべ』『ひさの星』『赤い蝋燭と人魚』、水墨的な表現にも通じる『万葉のうた』の原画と書の作品などを展示し、ちひろの絵に息づく日本的な美意識を探ります。　(山田実穂)

日中国交正常化40周年記念 中国の絵本画家展

●2012年9月21日(金)～11月30日(金)

後　援：中華人民共和国大使館文化部、日本中国友好協会、日中児童文学美術交流センター、絵本学会、(社)日本国際児童図書評議会、(公社)全国学校図書館協議会、日本児童図書出版協会
企画協力：株式会社ポプラ社、北京蒲蒲蘭文化発展有限公司
協　力：株式会社岩波書店、株式会社コンセル、株式会社小学館、株式会社童心社、株式会社徳間書店　光村教育図書株式会社

日本は、古来より隣国中国から文化的にも多くの影響を受けてきました。戦後、欧米の刺激を受けつつ発展した日本の絵本のルーツは絵巻物ですが、中国の画巻がそのもとであることは、よく知られています。長い歴史と広い国土、多様な文化を持つ中国には、花鳥画、山水画、年画*1等、豊かな絵画表現があり、壁画や画巻などの「物語る絵」は、現代の絵本につながります。しかし、日本の侵略に端を発した抗日戦争*2、その後の内戦、文化大革命*3と混乱の時代が長く続いた20世紀、絵本というジャンルは日本のようには育ちませんでした。

近年、経済発展著しい中国では、欧米や日本の絵本が多く翻訳、出版され、年々絵本への関心が高まりつつあります。絵本という芸術表現に意欲的に取り組む国内の画家たちも徐々に増えています。

日中国交正常化40周年を記念する本展では、現代中国の絵本界を代表する7名の画家約60点の作品を展示します。画家たちの作品には、自国の伝統と文化を踏まえつつ、子どもたちに優れた絵本を伝えたいという熱い思いが感じられます。本展が日中両国間の今後の交流と絵本文化の発展の一端を担うことができれば幸いです。本稿では、武建華、蔡皐、于大武の3名を、来春の東京館美術館だよりにて朱成梁、周翔、姚紅、熊亮の4名を紹介します。

武建華(ウー　ヂェンホァ)

3頭身のユーモラスな登場人物たちが活躍する武建華の作品は、親しみやすく、ぬくもりを感じます。武は、幼い頃から泥人形づくりを好んでいたといいます。中国の民間美術のひとつ、泥人形は、シンプルで素朴な味わいが魅力です。武の作中の独創的な造形の原点といえるのかもしれません。

『天下一の弓使い』(図1・2)は、中国内陸部に住む少数民族ユーグ族に伝わる話。色鮮やかな衣装、姫の髪型、敷物の模様などは、実際の雰囲気を伝え、リアリティがあります。おおらかな画風のなかにも、武が綿密な調査をし、たしかな知識をもとに描いていることがわかります。

蔡皐(ツァイ　ガオ)

教員生活を経て、文化大革命後に出版社に美術編集者として入った蔡皐は、日本をはじめとする外国の絵本に接し、多くの刺激を受けたといいます。

『なみだでくずれた万里の長城』は、万里の長城の建設に駆り出された夫を亡くした孟姜女の悲しみの涙が、長城を崩したという伝説です。孟姜女が美しく成長する場面(図3)は、画巻にも見られる異時同図ですが、蔡皐は、コマ割という現代的な表現方法で描きました。茶やスモーキーピンクといった落ち着いた色彩の場面の一方、万里の長城にたどり着き、夫の死を知る場面(図4)では、悲劇を予感させる黒を効果的に用いています。変化のある大胆な構図や色彩は、蔡皐ならではの絵本づくりといえます。

于大武(ユー　ダーウー)

三国志演義や西遊記などなじみ深い古典を、工筆画*4という中国伝統の画法で精緻に描く于大武。本展では、新作『北京　中軸線上につくられたまち』を紹介します。北京城*5の南北を貫く中軸線*6上を、前門より進みながら、紫禁城*7をはじめ、清時代の北京城(図5)、そして現在、中軸線がさらに北に延び発展する北京の街(図6)を描いています。北京城の建造物の数々は、シャープな無駄のない線と柔らかな美しい色彩で画面中央の中軸線に対しきっちりと左右対称に描かれています。そこに人々の営みが細かく描きこまれることで、北京という都市の記憶が生き生きとしたものになっています。北京で生まれ育った于大武の、古き時代を受け継ぎ、発展を続ける街北京への愛情が息づいています。(柳川あずさ)

＊1年画：民間絵画のひとつ。春節(旧正月)に門口やドア、室内に貼り、慶祝と邪気払いを願うもの。
＊2抗日戦争：1931年9月柳条湖事件（満州事変）に始まる日本の侵略戦争に対する中国の抗戦。1945年8月日本の敗戦にて終結。
＊3文化大革命1966－1976:毛沢東による権力・政治闘争。10年に渡る社会的混乱のなか、経済や文化活動が停滞した。
＊4工筆画：輪郭線の上に色彩を載せ、写実的かつ細密に描く中国画の技法。
＊5北京城：明・清朝時代（1368－1912）の都城。その基礎は、元朝時代（1271－1368）につくられ、周囲28.6キロの方形の城壁に囲まれ、大都と呼ばれた。
＊6中軸線：紫禁城を中心に南北に一直線に貫く線。北京城はこの中軸線を中心に、建造物が配されている。
＊7紫禁城：北京城の中央に築かれた明・清朝時代の皇帝の宮城。現在の故宮博物院。

●展示室1・2

図1　秋草のなかの少女　1969年

図2　十五夜の月　1965年

図4　あやめ　1973年

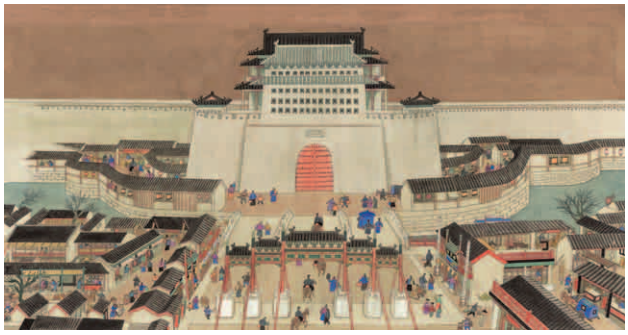
（右上）図3
梅『万葉のうた』
（童心社）より　1970年

（右下）図5
すすきと夕焼け　1972年

●展示室4

（上）図1・（下）図2　武建華『天下一の弓使い』（小学館）より　1994年

（上）図3・（下）図4　蔡皋『なみだでくずれた万里の長城』（岩波書店）より　2006－2010年



（左）図5・（右）図6　于大武『北京　中軸線上につくられたまち』（ポプラ社）より　2011－2012年

武建華（ウー　ヂェンホァ）
1942年南京生まれ。1978年より南京日報社の美術編集者として新聞のカットやデザインを手がける。1982年より子ども向け雑誌の挿絵を描く。『神女峰』で1989年BIB佳作受賞。

蔡皋（ツァイ　ガオ）
1946年湖南省長沙生まれ。師範学校で美術を学び、1981年湖南少年児童出版社に美術編集者として入社、以来子どもの本の装丁や挿絵を手がける。『パオアルのキツネたいじ』で1993年BIB金のりんご賞受賞。

于大武（ユー　ダーウー）
1948年北京生まれ。1978年より子どもの本、連環画の編集の仕事に就き、自身も作品を提供する。『ナージャとりゅうおう』で1988年野間国際絵本原画コンクール大賞受賞。

中学生ボランティア「高橋和真パッケージクラフト展」作品解説ツアー

●2012年7月27日(金)～8月18日(土)

後援：長野県教育委員会、松川村教育委員会

夏休み期間中、地元・松川中学校の生徒が活躍する中学生ボランティア。2012年は、ちひろの水彩技法を体験するワークショップ、高橋和真展の展示解説、図書委員による絵本の読み聞かせと、3つの活動を行い、188名の生徒が参加しました。初めての取り組みである、「高橋和真パッケージクラフト展」作品解説ツアーの様子を報告します。

パッケージクラフトとは、空き箱を使って昆虫や動物、乗り物などをつくるペーパークラフトのこと。30分間のツアーでは、館内のあちこちに展示された作品の魅力や制作にまつわるエピソードを、中学生が解説員となってお話しします。

本展にあわせて制作された松川村のキャラクター、すずむしの「リンリン」。材料となった「安曇野そばロールケーキ」の箱やラフスケッチ、パッケージのコピーでつくられた試作品を、完成品と見比べながら説明します。「つくる過程がわかると、よりおもしろいね」とうなずくお客さま。

作品のなかには、鼻を持ち上げる象や羽ばたくコンドルなど、動くものもあります。中学生から方法を伝授された参加者がコンドルを動かすと、大きな拍手が。動かした方は、「触ってみたいと思いながら見ていたからうれしい！少し難しかった」と感想を語ってくださいました。

最後は、一番大きな作品である「ライオン」を紹介。クッキーの箱140個を使ったライオン、実は13種類の動物が合体してできています。つま先はねずみ、脚はクジラとプレーリードッグ、そしてしっぽは蛇。取り外して見せると、「目からうろこ！」と、驚きの声があがります。

「お客さまにどんな印象を与えるかを考えながら、館内放送や解説をすることができた」「人の前で説明するのが苦手だったけど、少し改善できたかな」と、中学生はそれぞれに手ごたえを感じていました。（水谷麻意子）

安曇野まつかわサマースクール　8月3日(金)

主催・2012安曇野まつかわサマースクール実行委員会
共催・松川村公民館、武蔵野美術大学芸術文化学科、安曇野ちひろ美術館、安曇野アートライン推進協議会

今年は34名の参加者とともに、長年この活動に関わった地元の方々も参加し、「めくるめく！安曇野カルタであいうえお」を開催しました。学生たちは、村での事前視察の際、日々営まれる農業での細やかな心遣いや、古くから伝わる知恵、それを継承している人々に感銘を受け、このワークショップを企画しました。

午前中は、村内各地に立てた、村の食にまつわる読み札を着たかかしを、グループごとに探検して回りました。「暑い夏　ごちそうごちそう　氷餅」の読み札を着たかかしの前では、「氷餅って何？」と子どもたち。「水に浸し凍らせ、冬に乾燥させた氷餅は、寒いこの地域ならではのごちそう。昔はお菓子がなかったのでおばあさんがつくる氷餅が楽しみで、楽しみで」と地元の方。交流が少しずつ深まります。昼食には、読み札に登場した郷土食を試食しました。「普段食べる野菜よりも緑色だね」「氷餅って意外とおいしいね」と感想が。午後からは、探検から得たインスピレーションをもとに、フェルトや絵の具を使って思い思いの絵札を制作、個性豊かなカルタが完成。最後は大きな取り札を着て、カルタ取り大会です。取り札の子どもたちが寝転がるなか、取って取られての熱戦が繰り広げられました。終了後の参加者のアンケートには、「かかしさん、大切なことを教えてくれてありがとう」「改めて郷土の言葉や食にふれて、おいしく楽しかった」といった言葉が。

「かかし発見！なんて書いてあるかな」

「いつもより　鼻高々で　お手伝い」駆け寄るみんなを前に…「い」の札の子は隠れてしまいました。

松川村、武蔵野美術大学、美術館三者で取り組むこの活動も今年で10周年。節目の年に、松川村の食文化に触れる活動を行えたことは、村の生活とその基礎である農業を知る好機となりました。今後も地域に根ざした魅力的な活動とするために、課題や目標を見つめながら大切に取り組みたいと思います。（長井瑶子）

夕暮れミュージアム　8月25日(土)

安曇野アートライン推進協議会「夜のミュージアム」関連企画

日中とは違った表情の「夜の美術館」を楽しんでもらおうと、年に一度、夏の終わりに開催している「夕暮れミュージアム」（夜9時まで開館）。

開館15周年の今年は、“ピアニカ王子のマジックと音楽で奏でるいのちのコンサート”を開催。近隣の親子連れを中心に、約80名が参加しました。出演は、ピアニカ王子こと大友剛さん。第一部では、トランプやセロファンを使ったマジックを披露。抱腹絶倒、愉快なマジックと軽妙なトーク、観客との楽しい掛け合いで、会場は大いに盛り上がります。

第二部では、ピアニカと風船、ポンプをチューブでつないだ創作楽器“バルーニカ”が登場。そのユーモラスな形に子どもたちは興味深々。大友さんがバグパイプを思わせる音色の“バルーニカ”とピアニカを同時に操り、「キラキラ星」を奏でると、会場からは歓声が起こりました。

コンサート終盤には、スクリーンに映し出されたちひろの作品とともに、「夕焼け小焼け」「ふるさと」をピアノで演奏。郷愁を誘う美しいメロディーが会場に響きました。

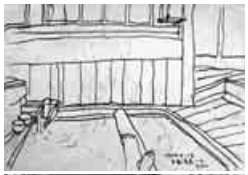
吹かなくても音がでる“バルーニカ”。バグパイプと同じ原理を説明する大友さん

ライトアップされた夜の中庭では、「夏の夜のおはなしの会」を開催しました。お化けがテーマのちょっと怖い絵本の読み聞かせに、子どもたちは少し緊張した面持ちで聞き入っていました。

安曇野ちひろ公園では、「安曇野まほらランタンによるイルミネーション」を開催。松川村の保育園児約200人の絵が、サラダ油の廃油を使ったエコランタンのやさしい光を通して浮かび上がり、安曇野の夏の宵を彩りました。（船本裕子）

ちひろを訪ねる旅㊼

1950年6月 信州・白骨温泉



湯船につかる夫・善明
（上）1950年6月18日／（下）同年6月19日

1950年6月、いわさきちひろは夫善明とともに、白骨温泉を訪れます。同年1月に結婚したふたりにとっては、実質的に新婚旅行といえる旅。この時期、日本共産党の路線上の混乱から、突然、職を失った善明は、ちひろ曰く「狭い部屋のなかを、熊のように歩き回って考えて」いたと言います。党と日本の未来を悶々としながら模索していたのです。そんな夫を気遣ったちひろが誘って、この旅は実現します。

6月13日に大町駅に着き、17日まで、ちひろの両親が暮らす松川村で過ごした後、ふたりは白骨温泉に入りました。

霊峰と言われる乗鞍岳の東側山腹、海抜1400mに位置する白骨温泉は山あいの秘湯。開湯時期は定かではありませんが、鎌倉時代にはすでに湧き出していたと伝えられます。江戸中期、元禄時代に本格的に湯宿が立ち、多くの湯治客が訪れるようになりました。白骨温泉の名を一気に広めたのが、大正時代の人気連載小説、中里介山の『大菩薩峠』でした。

「白骨」という奇妙な名の由来は、一説にはお湯の色。硫黄分が空気に触れて乳白色になったお湯です。慢性疲労や胃腸や肝臓の病気に効能があると謳われています。

ふたりが逗留した宿は、風呂場の様子から、18世紀半ばに建てられた古い宿のひとつと推測されています。

ちひろが残したスケッチには、湯船にゆったりと身を沈めた善明の姿がユニークな構図で描かれています。湯船から突き出た足の描写もユーモラスで、ふたりの楽しげな時間が伝わってくるようです。

お湯の効能もさることながら、この時間が夫に健康と元気を取り戻させます。このときのことを「ちひろは、私が困難に直面したり、スランプになったときでも、けっして直接的な激励をしなかった人です。いつのまにか雰囲気をつくって、自然の回復を待つといったやり方は、このときもそうですが、その後も一貫していました。」と、善明は記しています。（竹迫祐子）

ひとこと ふたこと みこと

8月4日（土）
しっている本、しらない本、おもしろいえ、きれいなえ、たのしいえ、ゆかいなえ、かなしいえ……すべてのえがみれてうれしいです。
（1年　山本ゆり）

8月5日（日）
5月6日(日)に兵庫の美術館でちひろ展を見ました。そこで作品を見ているうちにもっと興味がわいてきて安曇野に行きたいと思いました。そして、今日ここに来ることができました。外の景色は青い空と白い雲とアルプスの山の緑を楽しめて中に入るとちひろさんの淡い絵が迎えてくれました。とても心が落ち着き、なごみました。ありがとうございました。（ゆか）

8月7日（火）
広島に原爆が落とされた8/6の翌日の今日、ここへ来て『わたしがちいさかったときに』に触れています。30年以上前に東京の「ちひろ美術館」の会員となり、足しげく通ったことも遠い昔。今は年に1度も訪れなくなっていました。友人と長野に旅行に来ると決まったとき、真っ先に浮かんだのはここでした。旅程に入れてもらい、やっと初めてまいりました。
“自然”“子ども”“平和”ということをあらためて考えると同時に、私たち大人の“責任”を強く感じます。大切なものを大切にできない社会に未来はありません。大切にするために行動したいと思います。　（ゆみこ）

8月7日（火）
2度目の来館。ゆっくりと見ることができました。再来できたことに感謝します。トットちゃんの本のさし絵がとても心にとまりました。「本当は、いい子なんだよ」という校長先生の言葉が心に響き奥深いものを感じ、ちひろさんの子どもを愛する心が伝わってくる絵ととても合っていました。人を愛する心を私も持ち続けたいと思いました。ありがとうございました。
（元気をとり戻しつつある者より）

8月11日（土）
ちひろさんの絵が見たくてきました。小1の娘が教科書の表紙だ～（3冊も！！）と一緒にみてまわりました。私の子どもの頃、図書館の壁にたくさんちひろさんの絵が貼ってあったのです。多分、先生が好きだったのでしょうね。娘にもちひろの絵をいっぱい見てほしいなと思います。　（千葉より）

美術館日記

7月5日（木）
松本盲学校小学部の生徒5人が来館。ちひろの水彩技法を体験した。ちひろの絵の説明では、描かれているものをなぞることで形をイメージしてもらい、色は、夕日や海といった自然や食べ物に例えて紹介するなど、スタッフも試行錯誤しながらサポート。全員最後まで取り組み、缶バッジやカードを完成させた。後日、生徒一人一人から心のこもった手紙が届く。それまで美術館が好きではなかったという生徒からの「体験してみてよかった」という感想に、スタッフの喜びもひとしおだった。

7月14日（土）
開催中のパッケージクラフト展に出展している高橋和真さんが来館。ギャラリートークで、作家自ら制作の裏側や作品への思いを語った。集まった多くの参加者からは「見ているだけでは気づかないことが多く驚いた」「パッケージクラフトに挑戦してみたい」との声が寄せられた。

7月20日（金）
高山村の一茶館で「ピエゾグラフによる小林一茶といわさきちひろ展」が始まった。本展は既刊『ちひろと一茶』がもととなり開催が実現。わが子への愛情や四季の移ろいを感じる心など、2人に共通する思いが響きあう句と絵をともに、30点を展示。信州にゆかりの深い2人の作家の共演、地元の方にぜひ見ていただきたい。

7月26日（木）
長野県立こども病院に展示している、ちひろのピエゾグラフ作品の掛け替えに出向く。2006年より始まった院内での展示。外来や病棟など約25点の作品を季節ごとに掛け替えている。入院・通院している子どもたちや家族にとって、少しでも病院が楽しい場所になるよう、これからも活動を続けていきたい。

7月29日（日）
昨日から長野ロキシーで、ドキュメンタリー映画の上映が始まった。今日はほぼ満員の入りのなか、ちひろの長男・松本猛による舞台挨拶が行われた。質疑応答では、ひとりの方が、「3.11の震災で、福島にいる姪の子どもを亡くしました。映画に出てきた『赤い毛糸帽の少女』を見ていたら、その子と絵が重なって、まるで絵のなかに生きているように思えました」と語られた。戦争に反対し平和を願って、ひたすら子どもを描き続けたちひろ。会場は、今の時代にちひろの願いを受け止め、それぞれの深い思いがあふれた。

INFORMATION

●2013年春　展示予定　3月1日(金)～5月7日(火)

〈展示室1・2〉ちひろを支えた人々(仮)

絵本画家として活躍したいわさきちひろ。その活動の裏には、家族をはじめ、編集者、画家仲間など、画業を支えた多くの人々との出会いがありました。その出会いを糧に、ちひろは絵本画家として独自の道を切り開いていきます。本展では、絵本『わたしのえほん』や『あめのひのおるすばん』などの作品を展示し、関わりの深い人々の言葉とともに紹介します。

いわさきちひろ　『あめのひのおるすばん』(至光社)より　1968年

〈展示室4〉手から手へ
ー絵本作家から子どもたちへ 3.11後のメッセージー

主催：「手から手へ」実行委員会、ちひろ美術館　　共催：JBBY

子どもの本に関わる日本の絵本作家たちが中心となり、「3.11後の世界から私たちの未来を考える」というテーマで世界の仲間たちに呼びかけて作品を募った展覧会「手から手へ」。2012年にヨーロッパ諸国を巡回してきた展覧会が、日本で初めて開催されます。約150点の作品を展示し、画家たちの想いを届けます。

降矢奈々「子どもたちへの遺産」2012年

〈展示室5〉絵本の歴史

安曇野ちひろ美術館 イベント予定　各イベントの予約・お問い合わせは、安曇野ちひろ美術館へ。

詳細・最新情報はホームページからもご覧いただけます。 http://www.chihiro.jp/　TEL. 0261-62-0772　FAX 0261-62-0774

●秋の夜長の安曇野寄席　主催：安曇野ちひろ美術館、松川村社会福祉協議会

毎年恒例の安曇野寄席。秋の夜長のひとときを、落語でお楽しみください。
○日　時：10月14日（日）　開場17：30、開演18：00
○出　演：三遊亭時松・遊興亭福し満ほか
○会　場：安曇野ちひろ美術館
　　多目的ギャラリー
○参加費：無料（館内を見学する場合は要入館料）
○定　員：80名
○申し込み：ホームページ、電話、美術館受付にて寄席担当まで。

●安曇野スタイル2012 「ちひろの色」展
11月1日（木）～11月4日（日）

ちひろの色の世界を、現在活躍中の工芸作家がガラス、フェルト、染、紙などさまざまな素材を使い、表現した作品を展示、販売します。
○会　場：安曇野ちひろ美術館　多目的ギャラリー
○参加費：無料（入館料のみ）

安曇野スタイル2012
アート・自然・暮らしにふれる
秋の安曇野ゆったり散策

作・みよしまさこ

安曇野の各工房、アトリエ、ギャラリー、飲食店、農家などで工房公開や作品展示、特別メニューなど、さまざまなおもてなしをする4日間です。
http://www.azumino-style.com/

●〈館外展紹介〉毎日新聞創刊140年記念
いわさきちひろ展　母のまなざし・子どもたちへのメッセージ

主　催：北九州市立美術館、毎日新聞社、TVQ九州放送、ちひろ美術館
後　援：九州旅客鉄道株式会社、西日本鉄道株式会社、北九州モノレール、筑豊電気鉄道株式会社、NHK北九州放送局

いわさきちひろの絵本原画を含む水彩画やデッサン約140点のほか、遺品や復元された自宅アトリエを展示します。
○会　　期：2012年9月15日（土）～10月21日（日）
○会　　場：北九州市立美術館
○休 館 日：毎週月曜日(ただし月曜日が祝日の場合は開館、翌火曜日が休館)
○開館時間：9：30～17：30（最終入館17：00）
○入 館 料：一般1000円(800円)、高大生800円(600円)、小中生500円(300円)
※(　) 内は前売り及び20名以上の団体料金。
お問い合わせは北九州市立美術館（TEL.093-882-7777）へ。

●文化の日特別企画
ギャラリートークと原語で楽しむおはなしの会

「中国の絵本画家展」関連イベントとして、学芸員によるギャラリートークと中国語の美しい響きを楽しめる原語による読み聞かせの会を行います。
○日　時：11月3日（土）　14：00～15：00（予定）
○会　場：安曇野ちひろ美術館　展示室4
○参加費：　無料（入館料のみ）
※参加自由（事前申し込み不要）

●支援会員向け活動報告会のお知らせ

支援会員の皆さまに向けた活動報告会を、各館にて開催いたします。会員の方は、同封の参加申し込み案内をご覧の上、ファクスまたは電話にてお申し込みください。また、会員でない皆さまは、この機会にぜひ支援会員にご入会のうえ、ご参加ください（報告会当日の入会でも参加可能です）。
○開催日：10月13日（土）　於：安曇野ちひろ美術館
　　11月18日（日）　於：ちひろ美術館・東京
※東京館での報告会日程が、上記に変更になりました。ご注意ください。
○対　象：ちひろ美術館支援会員
○内　容：2011年度の活動報告ならびに支援会収支報告。ちひろ研究の成果として、ドキュメンタリー映画「いわさきちひろ～27歳の旅立ち～」上映会も予定。

●安曇野アートラインサイトリニューアル！

当館が加盟する安曇野アートラインの公式サイトがリニューアルしました。おすすめの美術館をめぐるコースの紹介など、新しいコンテンツも登場しました。
http://azumino-artline.net/

●冬期休館のお知らせ

2012年12月1日～2013年2月末日まで、安曇野ちひろ美術館は冬期休館いたします。2013年は3月1日（金）より開館します。

●おはなしの会

毎月第2・4土曜日11：00～
参加自由、入館料のみ。

●ギャラリートーク

毎月第2・4土曜日　参加自由、入館料のみ。
14：00～ちひろ展
14：30～世界の絵本画家展または企画展

CONTENTS

〈展示紹介〉ちひろ・和の心／〈日中国交正常化40周年記念〉中国の絵本画家展…❷❸
〈活動報告〉中学生ボランティア／安曇野まつかわサマースクール／夕暮れミュージアム…❹
ちひろを訪ねる旅㊼／ひとことふたことみこと／美術館日記…❺

美術館だより　No.72　発行2012年9月21日

安曇野ちひろ美術館

〒399-8501　長野県北安曇郡松川村西原3358-24　テレホンガイド0261-62-0777　TEL.0261-62-0772　Fax 0261-62-0774
http://www.chihiro.jp/　E-mail:chihiroa@seagreen.ocn.ne.jp